

亡き人とむきあう

徳仁寺 田中仁見

ある方から、『ほどなく、お別れです』という映画をご覧になりましたか？真宗寺院のご住職の立場からだど、どんな感想をいただきましたか？というご質問をいただきました。

早速、長月天音さんの文庫本を購入し、上映されている映画館に足を運び、その方にこのような感想を返答させていただきました。

葬儀社のディレクターとして、また主人公の女子学生のホールスタッフとして、遺族のみならず故人にも寄り添う姿、ひとつの区切りとしての葬儀、大変考えさせられる映画でした。

真宗の教えは、亡くなられた方は遠い世界に行ってしまうのではなく、遺族の方々の心に残り、より身近な存在としてむきあっていくことが大切ではないでしょうか。と、お話させていただきました。

文庫本では、葬儀とは死者のために行われるものであると同時に、生者のためのもので、生前にもっとしてあげられたことがなかったかという後悔、死者となったその人と別れたことよりも出会えたことに意識をむけることで、前を向き、明日へ一歩踏み出すきっかけを作るのだと書かれています。

そのことは、海法龍先生の、『誰のために葬儀を勤めるのか』の冊子の中で、葬儀は、「これまで」と「これから」を尋ねる儀式であり、死者は遺された人たちがひざまづいて悲しみ、「尋ねる」ということがなければ、死者の「死」が成就しない、亡くなったその人の人生が成就しないのです。そして同時に、生者にとっての「死」も「生」も成就しないとおっしゃっておられます。

私たちは「亡き人とむきあう」という事を通して、「いただきたいのち」について考えるご縁をいただくのではないのでしょうか。